

文芸サロン作品集



2022年10月

シニアネット福岡

(SNF)

文芸愛好会

私の好きな俳句

宮 由枝

◎いずこにも 龍める国の 天高し

《有馬 朗人》

◎子子の ポウフラ ふらふら沈む 力かな

《有馬 朗人》

◎月の夜や 石に出て鳴く キリギリス

《千代女》



短歌

一



山深く平家の落人住みしとふ
里に柿の実ゆたかに照らふ

里いもの太葉に残る 朝露を
いぼさぬほどの秋の風立つ



里いもの風にゆるがぬ茎強し
地中に太き芋つけらむ

私の八月六日

新川 正恵

昭和二〇年八月六日 午前八時十五分世界初の原子爆弾が広島に投下され十四万人が犠牲になった。

三歳になったばかりの私にはその日の記憶は殆どない。

父は広島企業の勤務していた。母と祖父母は呉の自宅からすし詰め状態の汽車に乗り広島に通い父を捜したが見つけることはできなかった。直爆で生命を落としたと思われた。

悲嘆にくれる母の姿は幼い私の心に強く焼き付いている。

兄は十三歳と十歳、妹は生後五ヶ月であった。

父の膝ぬくもり憶えぬ吾なれど胸に抱かれし笑顔の写真

戦後呉には米軍基地がおかれた。その家族の住む街、虹村には学校、教会、スーパーマーケット、映画館、公園があり整った小さなアメリカがあった。

私の生活とはあまりにもかけ離れた夢のような空間に異質なものを感じていた。

七十七年が過ぎ、平和都市広島には世界中からの観光客の絶えることはない。

平和を願い折り鶴を掲げた原爆の子の像には世界中の人々から多くの千羽鶴が贈られてくる。

その折り紙は再生して平和を受け継ぐ子らの卒業証書になるという。

平和を祈る世界の人々の心が受け継がれることに感銘を受けている。

二〇一五年、国連サミットでSDGs（持続可能な開発目標）が採択された。

人々の平等、地球環境、平和など十七項目をうたい、世界的な広がりを見せている。

穏やかで便利な暮らしに甘んずることなく、SDGsの一端をしっかりと考えていきたい。

戦後七十七年を迎えた今日世界では争いが収まることはない。特に、ウクライナの戦争は観るに堪えられない。今なお原爆症で苦しむ人のあること。福島の原子力発電所の地震による大きな問題を再び繰り返してはならないと強く強く願う。

父逝きて七十七年目の夏が来る観るに堪えない現世の戦火

剣舞まう若き日の姿凜凜しかりわが胸に生く父三十路の半

辻地蔵に手を合わせる子の優しかりウクライナの子の平和を祈る

ひねもすを戦火の下に惑う人和して大き息する日はいつや

「げんきですか」嫁の一言でんわから活力湧きて今日頑張れる

フジバカマ群れ咲く九重に渡り越しアサギマダラの華麗なる舞

おい、隣に行つてカナヅチ借りてこい。おまえさん、人に貸すと減つちまうからいやだと断られたよ。チェツ、けち臭え野郎だ。じゃ俺んちのを使おう……

これ落語のやり取り。どちらがケチかで笑いをとる。

ひと昔前、弁当をもつて学校へ、さあ弁当、弁当のふたについてたご飯粒から食べる、一粒のこらず箸でとつて口に入れる、面倒くさいとふたをなめる子も。

まあこれはケチとかいう話よりも、お百姓さんが汗水たらして作ったお米を大事にいただく、一粒も粗末にしないという精神教育、道徳教育がもたらした話かな。今時我が家の台所の流しにはご飯粒がわんさか落ちていているし、世間では、茶碗のご飯を一粒残さずにきれいに食べきる人はあまりいないんじゃないかなあ。

ケチの話をしようと思つていたらなんだかご飯粒を大切にの話になつてしまった。ユーターン。

一見鷹揚で懐も暖かそうな友人の家に行つた。洗面所のハミガキチューブが二本、チューブがへちやげている。もう捨ててもいいんじゃないの、と言いたくなる。テーブルのハチミツ、最後の一滴まで使おうと小さなスプーンでかき出す友人。この人案外ケチンボなのかな。いや、これは始末家、儉約家というべきか。

たしかにかつては、大根おろしはあまりに小さくなるまで下ろそうとして指を切つたり、鉛筆は短くなると継ぎ足しの金属の鞘を使つていたこともありました。これらはケチというより節約の話ですかね。いや、ものをだいじに、かな。

職場で天どんをとると必ず割りばしを二本注文する人がいた。ところが食べるときは自分が持つている箸を使う。割りばしはそのまま引き出しに。噂では、引き出しとロッカーには割りばしがあふれているとか。このひと、友達が訪ねてくるとお茶に誘う。社員喫茶に連れていく。ここでコーヒーをご馳走する。愛想がよくて気のいい男。がこの人コーヒーの注文は一つ。自分は飲まない。さつき飲んだからと言いつつながら取り繕う。

けち臭い男と思つていたらこの人、ひそかに株取引で小遣いを稼いでいるという。

ケチ、ケチ臭い、ケチンぼう、しみつたれ、吝嗇、始末屋、始末家、節約家、合理主義者、しっかり者、儉約家、吝嗇坊（しわんぼう）、ドケチ。

言葉の持つ響きが微妙に違う。使うTPO、時と場所、場合によって響きが異なるものの言い方にご注意。声の大小、抑揚、文脈、これによって違いが出る。ヒソヒソ話で使うと大抵悪口と非難、嫌み……

母親は市場に行くと、必ずはなから、これナンボなのと言う。値札に売値書いてあるよ、とは店はやわらない。ソロバンを入れてそのソロバンを見せる。母親はそのそばの球を自分で動かして、「こないしとき」とひと声、店主は「へえおおきに」と応じて売買成立。幼時、よく見た光景である。大阪はしっかり者の町でした。

■テレビ観戦はななめ

山本 為三

テレビで相撲を見る。のこった、のこったの対戦そのものと、もうひとつ、観客席にも目をやる。テレビに映るのは特等席である。ここの席に座れるのは超熱心な相撲ファンでお金持ちだと思う。ひと勝負ごとに手をたたいたり隣の人と感想をしゃべりあったりしている。

ところが、中に、まったく無反応な人がいる。手はたたかない、表情が動かない、姿勢も崩れない、しゃんとしてスキのない姿かたち。着こなしの良い和服の中年女性。花柳界のお方かも。誰かに特等席の切符をもらって来たのかな。微動だにしない、スゴイ鍛錬である。大勝負で場内がどよめいている。それでも動かない崩れない。

野球でホームランが出る。カメラはそのホームランを見事に追跡する。外野席では飛び込んできたボールに客が殺到、ボールの奪い合いになる。奪ったボールはいただけるらしい。

ところがである。テレビの画面は一瞬にして観客席からグラウンドに切り替わる。ホームランを放った選手の塁を駆ける画面に替わる。つまり、あのホームランボールを手に入れた人の姿がみられない。ホームランボールを手にしたのがどんな人なのか、大人か子供か、おっさんかおばはんか、全く分からない。どのくらいよろこんでいるのか、取りそこなった人は大人しく引き下がったのか、悔しいだろうな、それが分からない、残念、ちよつとしたボールの奪い合い、私はその光景を見たくてテレビ中継を見ているのに。

野球をテレビで見ていると、つくづくキャッチャーは大変だなあと、同情してしまう。

とりわけ一球ごとに座ったままピッチャーに返球しなければならぬ。その返球は確実にピッチャーの胸元あたりに投げ返さないといけない。つまりピッチャーが何の苦勞もなく受け取れるように返球しなければならない。ピッチングで疲れているピッチャーに余計な負担をかけない、返球を取るのに飛び上がった背をかめたりマウンドを駆け下りたりさせてはいけない。ピッチャーの腕さえ伸ばすような返球はダメ。要はピッチャーのグローブに、姿勢はそのまま、ストンと入るように返球しろよ、これがキャッチャーに課せられた重大責務である。

これは小学六年生の時、草野球でキャッチャーをしていた私の体験談である。その時コーチか監督か、それらしい大人が厳しく指導したのがこの丁寧な返球である。正しいかどうか、どこまで通用するか保証できないがなぜか今なお耳にこびりついている。テレビで野球を見る時、私はいつも注意深く、このキャッチャーからの返球を見ている。楽しみながら返球を見ている。勝敗は二の次。

— そうだ審判がいた。主審が新しいボールをピッチャーに投げるとき、見事にスポッとピッチャーのグローブにおさめる。滅多にワイルドピッチなどはない。審判も日ごろキャッチボールで練習しているのかな。

キャッチャーは足を折って腰を落としたままの姿勢で返球する。ピッチャーが投げる限りキャッチャーはこの姿勢と動作でピッチャーに付き合う。キャッチャーは大変だなあ。キャッチャーは肩とコントロールが良くないと務まらないよね。あの野村監督は言い放つ。頭ですよ、頭がよくなないと務まりませんよ。



■高校野球 ボロ負けとボロ勝ち

山本 為三

小学生の頃、夏の甲子園、高校野球全国大会に行った。それも一日目から。入場行進に感動し体が震えた。心臓の高鳴りは今でも記憶にある。なぜそんなに感動したのか覚えていない。強豪の勢ぞろいをこの目で見たからなのか、行進曲と一糸乱れぬ選手たちの歩調と精悍な顔つき、つまり耳と目から入る刺激に興奮したのか、多分手も足も震えていたのではないか。甲子園近くの知り合いの家に一泊か二泊かしての観戦だった。

その日、京都の平安高校が試合前にシートノックをした。シートノックをしている人が片腕だった。これにもびっくりした。えらく器用に全選手にノックをした。片手ノック、それは不思議な光景だった。

ノックをしていたのは西村進一監督、西村監督は平安高校の前身平安中学の選手として優勝経験がある。年齢的にはジャイアンツの強打者川上哲治と同年代。中学を卒業して立命館大学へ、その後大学を中退してプロ野球名古屋軍(現中日ドラゴンズ)に入団、シヨウトで活躍。が徴兵されて南太平洋で参戦中大砲が暴発、右手首を失う。

復員したあと1948年母校の監督に。右の右手首にボールをのせる鉄の輪を作り、左手にバットを握る。片腕ではなく、片手首であった。そんな監督とは露知らずただただ片腕ノックだけが目に焼き付いている。甲子園の観戦は後にも先にも初めて。入場行進で体が震え、片手ノック(正確には片手首)にびっくり仰天。以来夏の甲子園は今なお特別の思い出として記憶に刻まれている。

さて、毎年、夏の大会の楽しみは地方大会の点差である。甲子園の激闘、汗と涙の青春ではない。つまり甲子園の予選ともいえる地方大会、そこでのボロ負けとボロ勝ちに注目する。点差の大きさ、その数字を眺めながらいろんなことを想像する。勝った方はどんな気分かな。点差をつけて余裕の笑顔で帰校するのかな。負けた方はうつむいて学校に帰るのかな。友達に合わせる顔がないと格好悪さに肩をすぼめて帰校するのかな。いやいや案外歓迎されてはにかむのかな。逃げなかった、あきらめなかった、ふてくされなかった、胸を張っての帰校……であれかし。

史上有名な点差は青森県大会、1998年の出来事。122対0。7回コールド。

122点は私立東奥義塾高校、ゼロ点は県立深浦高校。何しろ点差が3桁になったのは夏の大会史上はじめて。

この点差122は全国的ビッグニュース。地元青森では大騒ぎ。ゼロ点の深浦にはよ

く頑張った、最後まであきらめず投げ出さず食らいついたのは立派、勝った東奥義塾にも勝ち誇らずに手抜きもせず、なめ切った態度も見せず戦ったのはお見事という賞讃があった。

一方で、こんな負け方をするようではそもそも出てくる資格がない、相手校に失礼だと深浦を非難。勝った東奥義塾には少しは手加減しろよ、何もそこまでやる必要はないのではないか、相手の立場を考えろというお叱り。

さて、ことし、2022年の地方大会。全国の試合結果が新聞に載る。ありました。ボロ負け、ボロ勝ちが。7月11日、千葉県大会 千葉学芸82対0わせがく。これが今年の地方大会の全国最大の点差だった。

わせがくは通信制高校。野球部員は7人、部員外の助っ人が5人。5回コールド、3時間におよぶ試合だった。

(わせがくの校名：大学受験の予備校を運営する早稲田学園により設立された通信制の高校、早稲田大学と関係なし)

点差が大きい試合には特徴がある。たいていは1回戦であること。そして多くの場合負ける方はゼロ点である。負けた側が1点や2点を入れての大差というのはめつたになり。つまりボロ負けボロ勝ちになっている。つまり負ける方は手も足も出ないという惨敗。あの青森の深浦は野球経験の少ない1年生が中心のチームであった。片や東奥義塾、かつて甲子園に出たことがある実力校。試合が始まったの1回目39点を許した深浦、よくも不貞腐れずに7回まで戦い続けたものと敬服に値する。快挙とさえいえる。

野球は不思議なスポーツ。いかに打ちまくられていても、いかにボロ負けであつてもどこかでアウトを取り、スリーアウトでチェンジになっている。つまりバットを握る攻撃側もいずれ誰かがアウトになる。打撃は永久に続かない。毎回守備につくボロ負けチームは足取り重く、自分を励ます雄たけびなどとも出ない心境、もう試合をやめて家に帰りたいと思うだろうが、そこはぐつとこらえる。えらいなあ。すごいなあ。感嘆あのみ。

点差の大きなゲーム。どんなに点差が開いても観客は暖かく試合を見守っている。やつの思いでフライを捕球しアウトが増える。すると観客席に大きな拍手が起きる。懸命にアウトを重ねようとするナインの姿はまさに神々しいとさえ思ってしまう。あきらめないプレーに共感し、手に汗を握って応援する。顔を洗って出直して来いといった負け組批判はととても思いつかない。

■園児バス置き去り事件

山本 為三

置き去り事件のあと全国の園ではいろいろな対策が取られている。置き去りにされた園児が締め切ったバスの中で声を上げても外には聞こえない。テレビで見た。そこである園では運転席のクラクションを鳴らす訓練を園児にさせていた。クラクションはハンドルの真ん中にあるスイッチ部分を手で押し下げて鳴らす。子供にとっては押し下げには相当の力がある。手とか指の力は至って弱いのが子供である。そこで訓練している園では、ハンドルの真ん中に座らせ、お尻でクラクションを押しつけて鳴らす実習をさせていた。

驚きました。幼い子が本当にそんなことができると思っているんですかと聞きたくなかった。子供は置き去りされて閉じ込められて泣き叫んでいる、うろたえている、そんな時にああハンドルに座ればクラクションが鳴る、と思いつきましようか。

ハンドルに座るのも簡単ではない。運転席に足をかけて這い上がりそのあとハンドルの真ん中に座る。大人が考えた訓練が子供に通じるだろうか。園側はこうして訓練もしていますと宣伝したいのだろうが無茶な置き去り対策。テレビがまた無節操、無批判にこれを取り上げているお粗末さ。無神経ぶり。

園児バスの置き去りは全国の園でしばしばあるらしい。海外でも頻発しているという。だから電子機器でチェックできるようにしている園もある。どこかの国でバスのエンジンを切ったらブザーが鳴る装置をとり入れた。みそはこのブザーを止めるスイッチがバス車内のうしろにあること。ブザー停止のスイッチを押すために否応でもバスの後ろに行く。チェックは自然にできるすぐれもの。本当ですかね、見落としはありませんかね。

そもそも置き去りを防ぐ方法なんてそんなにむづかしいことなのだろうか。電子機器まで備える必要がありますかね。要はバスが園に到着したとき、運転手と同乗の大人が全員バスを降りたか、目で見て置き去りがないことを確認すればすむこと。それこそ10秒もかからない。いやいや、座席の下に潜り込んで寝ている子もいるんですよ、ちよつと目で見てもわからないこともありますので・・・子供は思いもつかない行動をします・・・こんな言い訳や解説があつたとか。だから大人二人がバスに乗っているのじゃないの。

なんでもデジタル、電子機器を備えれば効率的にことが済む時代。それに慣れて機器に100%の信頼をよせる生活。あの小さな卓上計算機、この計算機が世に出だしたころ、念のためと、検算をしていたら周囲の失笑を買ったことがある。何事にも疑り深い

習性はもう通じないのか。今でも重要な計算には検算をしている。機器の故障や打ち間違いがあるから。

なれる、この言葉に慣れる、馴れる、狎れるの三つの漢字がある。うるさい上司の口癖は「君らのやり方は一番悪い獣へんのなれるだ」とのたまう。そんな字は知らんよと同僚はひそかに反発。辞書で調べた。ありました。狎れる＝なれなれしくする、あなどるとある。いずれもイメーজの悪いことばである。毎日の送迎バス、送り迎えなど慣れたものよ、この作業をあなどったんですね。

電子時代、つまりこれはひと手間かけることをやめる、もつと効率よく暮らしましょう、その方が楽ですよ、幸せですよとの時代ですよ。こうなると人は手作業を侮る、嫌う。危ない危ない。

■お見合いの話

山本 為三

女性作家やエッセイストが自らのお見合い話を披露することがある。たいてい私は断りましたという話である。向田邦子さんにもご自身の話か人かお聞きになった話か忘れたがお見合い話の一文がある。

その日その時間に、にわか雨が降った。見合い会場の料亭で相手を待った。やってきたので玄関先で相手を迎えた。かなりの雨。相手は傘をたたんで傘置き場に傘を置いた。傘の置き方が上下逆である。手で握る部分を下に行っている。そのほうが早く水が落ちるかもしれないあとと感心した、いやちよつと待てよ、このひとは節約家、傘を取っ手を上にして立てておくと水が下の部分に集中して錆びていく、これを氣遣って取っ手を下にしたのかなと気づいた。

そのあと足元を見た。靴にビニールカバーが被せられている。うわー用意のいい人、靴を大事にする人……朝出かけるときに今日は雨が降りそう、傘と靴のカバーをカバンに入れて出勤する。いや、いつもその準備をしている。用意周到の生真面目男。

この人は断りました。こういう几帳面な方とはとてもお付き合いできない。私はいたっておおざっぱな女。こういう方と家庭が持てるわけがない。

別の人。ホテルでお見合い。料理のあとのコーヒー。この人カップを持つとき小指を立てる癖がある。ピンと上に立てているわけではないが小指だけがえらくカップから離れている。なんか弱弱しい、女っぽい、上品というのではない。何か気になる癖。向かい合って何か邪魔になる癖。この小指を見ながら毎朝コーヒーをいただく……とてもとても。

おことわりいたしました。

また別の人。お見合いがすんで男性がレジで勘定中、硬貨が何個か足元に落ちて転がった。男性は身をかがめて硬貨を追う。薄ぐらい足元を転がる硬貨。それを懸命に追いかける。暗がりですべてかがめて硬貨と格闘している大の男。二、三枚拾ってまだどこかに落ちていないかと探っている、大きな尻突き出しているの奮闘ぶりは男でもあまりいただけない。突き出された尻になぜか幻滅、硬貨ぐらいほっとけよとは言われないが熱がさめた。

ていねいにお引き取りいただきましたとか。

人のちよつとしたしぐさ、クセ、それをえらく嫌う人、気になる人、気にかけない人。特に食事のとき、人は長年のクセを持つ。コーヒーカップの小指も食事時のクセですがこの人の長年の流儀なんですよね。お箸の使い方。食べ物を口に運ぶとき、口に入れるとき。口の中で噛むときの噛み方。

口に入れたものをほほと歯茎の間にためるようになって徐々にかみ砕く人。この人に向き合って食べるとき、頬のふくらみが気になって仕方がなかった。箸をうまく持てない人にこう持ちなさいよと親切に教える人がいた。食べるときにクチャクチャ音をたてるひと、これはあとでみんなが気づいていたことが分かった。お見合いならお引き取りいただくケース。

日ごろ、人とおつきあいで相性が合う、合わないが話題になります。大きくはその人との考え方の合う合わないがありますが、小さくはこういうちよつとしたクセやしぐさもかわりがあるような気がします。

相性の話でもう一つ。会って面白い人、楽しい人かどうか、これもありますね。同窓会があった。その人と久しぶりに会って、二次会を失礼して二人で喫茶店に行きました。高校大学とラグビーをしていまはサラリーマン。体格はいいし顔つきも標準以上。向かい合って一時間、なにか物足りない。話が面白くない。話が広がらない。自慢話はないがまじめすぎる。憧れのラガーであったが面白くない人、こちらを愉快にさせてくれない。喫茶店行きは失敗でしたと女性がこぼしていた。

『敬老の日』に思う

手柴 正義

九月十九日敬老の日の四日前の十五日、マンションの呼びベルがなったので、ドアを開けると、民生委員の方が「敬老の日」おめでとうございます…今年もコロナ禍のため、お集まり願うての敬老会は中止になりましたので、お祝いの品を届けにまいりました。

手柴様は、今年奥様が八十歳になられたのでお二人分のお祝いのお菓子とお米券をお持ちしました…コロナもなかなか収束に向かいません、健康に気をつけてお過ごし下さい…何か有りましたら、この電話番号に連絡してください、と言つて連絡表を渡され、急ぎ次の高齢者宅に向かわれました。

二年前の西新地区の「敬老会」を思い出しました…記憶が定かでないところも有りますが…S学院大学の食堂会館二階会場に地区八十歳以上の該当者六百名？の内、約百名？の皆さんが、車椅子での参加者も一緒に…幕の内弁当に西新小学校一年生の生徒からの「おじいちゃん、おばあちゃん…敬老の日、おめでとうございます。体に気をつけて元氣にお過ごし下さい」とのホヤホヤの手書きメッセージ入りの封書の置かれた机に座り会式を待つ。

何時ものように関係者、来賓挨拶に始まり、メインの昼食会は幕の内弁当（一口ずつ楽に食べられるように十二の枠に料理、果物にデザート、真ん中に型押しで煮こみ人参「寿」を添えた）とお茶でのお祝いの乾杯・会食…！

会食後の余興は、区内のおばさまたちのフラダンスにお祝いメッセージをくれた子どもたちの遊戯、同好会有志の詩吟等々…アット言う間の二時間。

帰りが大変、普段は、エレベーターや階段でスイスイ退出できるのが、階段は危ないとのことで、参加者全員を定員（六名？）のエレベーターで一階へ誘導、待つこと二十分？

人生百年時代…高齢者に優しく敬老して頂くこと大変嬉しいことですが、市や若い人にこんなに負担をかけて良いのかなあと思います…帰宅したことを思い出しました。



《付 記》

日経新聞・文化欄（9／6）の小島ゆかり（歌人・六十六歳）さまの投稿が目に留まりましたのでその一節を紹介します。

（2022. 9. 30・手柴 正義）

『風の章』

秋は風の章。まだまだ暑くても、残暑を秋署しゅうしよと呼び替えて、そのシユウのひびきにすら、涼しい風の気配を感じるのである。

「古今和歌集」の「夏歌」の最後の一首は、夏と秋とが空ですれちがう歌。
なつのうた

そして「秋歌」はこの一首で始まる。
あきのうた

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」

ふじわらのとしゆき
（藤原 敏行）

目にははつきり見えないけれど、風の音にはっとして秋の訪れを感じるという。

現代人のわたくしたちには、古典和歌はまるで縁のない遠いもののように思われがちだけれど、じつはそうではない。

日本人の季節感の源流には、古歌に詠まれた四季の情感がある。

「万葉集」からほぼ百五十年後の「古今和歌集」に、はじめて四季の部立ぶだてが登場し、春夏秋冬のみならず、移り行く季節を細やかに感受しつつ、そこに人の心を重ねて詠む歌の配列が工夫された。

それが以後の季節感のテキストになったのである。

短歌講座や講演会などで、そろそろ秋ですねと言って「秋来ぬと」の歌を口にすると、深く頷かれる方あり、ふと目を遠くされる方あり。

いまなお秋は、この歌のようにやって来るのだ。

一方で、初秋に齢を重ねたわたしは、さいきんもつばら、この歌のパロディーを作って老化を笑い飛ばしている

「ボケたりと目にはさやかに見えねども物忘れにぞおどろかれぬる」

古典の名歌をけしからんと、自分を叱りつつ、やはり歌は楽しいのである。

最近、まわりの自然が気になりだした。

あぜ道に、今年も忘れずに咲き始めましたよ、と語りかけている花が、目に留まった。秋の彼岸の訪れを思い出させてくれる花が咲き始めたのだ。カメラを取り出して、しばし彼岸花と睨めっこしながらシャッターを押す。

我が家の庭にも足を向けて、被写体になるものを探してみた。あるある。今まで気付かなかった所に、植えた誰かさんに怒られるかもしれないが、さまざまな花が無造作に、咲いている。野牡丹、ベコニア、紫式部、ゼラニウム、箒草などなど。ひっそりと咲いているものもあるが、確かに秋の気配を漂わせている。なかには、つつじ、イソトマなど、夏のなごりを灯して健気に咲いているものもある。

シニアのパソコン教室が盛況と聞いた。シニアがシニアに教えるスタイルに、気軽さを感じ、始めてみた。日々の生活や日頃の思いつきを、さしさわりのない程度に、ネット上に記録していこうと、ブログや画像処理の勉強をしている。写真を中心に、文章は控えめがいいらしい、と云うことでカメラを持ち歩くようになった。おかげで周りの自然が、目に入るようにもなった。花の名前も、にわか勉強だ。

台風のおおりに受けた気まぐれな空が、晴れあがったある日、自らも気晴らしにと、秋の気配を求めて車で出かけた。いつもの年より四、五日遅れで満開になりだした彼岸花に交じって、かぼそいコスモスが二、三輪咲いていた。別のところでは、赤色に交じって白い彼岸花も咲いている。カメラに収めては西の方へと車を走らせる。

しばらく走ると、少し山つきの道端で、黄色のコスモスを見つけた。勿論カメラに収め、また走る。目的地もなしに、着いたところが日帰り天然温泉「ななの湯」である。平日の駐車場は空いていた。車を降りると、どこからともなく金木犀の香りが届いてきた。どこから？ と、しばし歩くが見つかからない。

ゆつくりと湯につかり、売店の栗ごはんや田舎惣菜を求め、簡単な昼食をすませて、自然に対する日頃の疎遠を反省しながら帰路についた。

自然とは、あるがまま、自ずからそうなっているさま、天然のままて人為が加わわらないさま、と広辞苑には書いてある。また、自然（しぜん）という言葉は、明治時代の哲学者である西 周が、英語の nature の訳語に充てた言葉だそうだ。それ以前は、仏教語としての自然（じねん）という言葉があったらしい。そう言えば、自然薯（じねんじよ）と言う。

秋の日和に誘われて、自然を感じてのそぞろドライブを楽しんだ。この先、幾度も重ねていきたいドライブである。

これも「元気に老ゆ」の一助になるだろう。

(二〇二二・一〇月)

※十年前、シニアネット福岡とのお付き合いが始まった頃の作品である。

五月下旬のことである。地元の小さな旅行社の勧めで、シニアネット福岡の仲間自分たちだけの日帰りツアーを思い立った。

行き先は、玄界島である。福岡県避密の旅の補助金二千五百円を活用すると、弁当付き、添乗員付き、更に千円のクーポン券がついて、個人負担が三千円と割安である。

早速、会員に一斉メールを発信すると、「コロナ禍の中だけど、やつと出歩けるように成りましたね」「こんな機会でないところではないですからね」と言つて、数日のうちに二十五、六名ものの申込があった。火曜日希望者が十六名、水曜日希望者が九名、二班に分けて実施することになった。

私は、火曜日に参加した。博多ふ頭第一ターミナルに八時二十分に集合し、避密の旅補助金の必須条件である身分証明書と三回目コロナワクチン接種証明の確認を終えて、八時五十分発の市営渡船に乗り込んだ。梅雨入り前の博多湾は、好天気にも助けられて波は穏やかであった。左に能古の島を見ながら約三十分で、玄界島に着いた。

東区の志賀島と西区の唐泊との両翼に包み込まれた博多湾を抜けると、玄界灘である。この外海に浮かぶのが玄界島だ。この島は福岡市西区であった。

西方沖地震で大きな被害を受けたこの島の住宅は、地震後全て建て替えられて、かつての漁村の面影は全くなかったという。今日の前に見えるのは、南斜面を有効に活用したひな壇式の新興住宅地そのものである。

上陸後、渡船待合室で島の状況を聞いた。地震の前には七百人以上の人口が現在では四百人にまで減ったそうだ。実際には、本土に住む人が多くいて、もっと少ないという。

一周四キロメートルの時計回りの旅にでた。八十七歳を筆頭に八十代が八人、七十代が七人、一番若い六十八歳が一人の計十六名が添乗員二名の引率のもとに一団で歩く。勿論ゆくりとした足取りで。

歩き始めてすぐ、道中一番高いところに上らねばならないが、ここにはエレベーターが設置されていた。ビルの五階ほどの高さまで上がり、少し歩くと神社がある。参拝をして坂を下ると後は全て平地である。

野生のサクランボをもぎ取って食べながら坂を下ると、急病人のためのヘリポート基地に出た。その西側向こうを見ると、小学校の頃、対岸の唐泊から数家族でサザエ取りに来たことがある机島があった。大きな島だというイメージと違って、小さく見えるのは大人になった所為だろうか。

島内一周の道は、ほんの少しの砂浜を除いて殆ど道の左側は防波堤で囲まれている。外側は大小の岩が群立し、サザエやアワビ取りには絶好の岩場のように見えた。

島の北西二百メートルに、円錐形の島、柱島がぼつんと大きく浮かんでいる。

糸島の二見ヶ浦海岸に夫婦岩がある。この岩を斜め西の方から見ると、夫婦岩の間に、この柱島が遠くに見える。遠くにあるから、あたかも子供岩のような姿かたちだ。良く晴れた日でないと写真には写らない。

この子供岩と称する柱島をすぐそこに見ることが出来た。夫婦岩より格段に大きな島である。この柱島の傍まで来られただけで、玄界島訪問の目的は達せられた思いがした。

柱島を左前方に見れる岩場に、おもいおもいに陣を取り、お昼の弁当を食べた。穏やかな波が岩場に打ち付け、海鷗が波に戯れながら魚を探している。

好天気過ぎた暑さにも負けず、多くの高齢者が、誰一人愚痴も、弱音も吐かず、無事に博多港まで帰り着いた。

福岡に住み、七十数年にもなるのに、未だ出かけたことのないところが、近くにあった。狭い日本、まだまだディスカバーすべきところが多いようだ。

(2022年6月)

